事根源集釋

上

第三八〇號
一部一冊
昭和一年一月一日
滋賀縣立膳所中學校
之部

一部
冊數
三

1353
vol 1

公事根源目録

正月

一 四方澤 一日
二 供御藥 同日
三 供御節供 同日
四 朝賀 同日
五 小朝澤 同日
六 元日節會 同日
七 内侍所御供 同日
八 供若水 立春日
九 供若菜 十七日
十 子日遊
十一 御杖 上卯日
十二 二宮大饗 二日
十三 朝覲行幸 同日
十四 除時令 同日
十五 視告朔 三日
十六 御國忌 四日

十七 叙位 五日
十九 御齋會 八日
二十一 太元帥法 四日
二十三 給女王祿 同日
二十五 御齋會内論義 十日
二十七 御薪 同日
二十九 射禮 十七日
三十一 仁壽殿觀音供 同日
三十三 國忌 二十五日
三十五 外記改始
十八 白馬節會 七日
二十 真言院御修法 同日
二十二 女叙位 同日
二十四 縣召除目 十一日
二十六 獻御粥 十五日
二十八 踏歌節會 十六日
三十 賭弓 十八日
三十二 内宴 二十一日
三十四 神祇官獻御贖物
三十六 春書奏 三十日

三十八 七瀬御祓
三十九 代厄御祭
四十 火災御祭
二月
四十一 釋奠 上丁日
四十二 卒川祭 上酉日
四十三 春日祭 上申日
四十四 大原野祭 上卯日
四十五 園并韓神祭 上丑日
四十六 列見 十一日
四十七 祈年祭 四日
四十八 祈年穀奉幣 廿二社二月七月二度吉見奉之
四十九 小野御忌日 廿五日
五十 伊勢仁王會
五十一 位祿定
五十二 季御讀經
三月

五十二 御燈 三日
五十四 藥師寺最勝會 七日
五十六 鎮花祭
五十八 東大寺授戒

四月

五十九 吉祓 更衣 齋院御禊 一日
六十一 貢氷 同日
六十三 稲荷祭 同日
六十五 平野祭 上申日
六十七 杜本祭 同日
六十九 當宗祭 上酉日
七十一 廣瀬龍田祭 四日
七十三 灌佛 八日
七十五 月次祭 中申日
七十七 關白賀茂詣 同日
七十九 中山祭 同日
八十一 駒牽 廿八日
八十三 三枝祭
八十四 獻菖蒲 三日

五十三 曲水宴 同日
五十五 石清水臨時祭 中午日
五十七 京官除目
六十 孟夏旬
六十二 大神祭 上卯日
六十四 山科祭 上巳日
六十六 松尾祭 同日
六十八 當麻祭 同日
七十 梅宮祭 同日
七十二 擬階奏 七日
七十四 伊勢神宮祭 十四日
七十六 賀茂國祭 同日
七十八 賀茂祭 中酉日
八十 吉田祭 中子日
八十二 新日吉祭 三十日

五月

八十五 五月節會

八十六 端午節 五日
八十八 紫野今宮祭 九日
九十 賀勝講
九十二 著鍬改

六月

九十三 御贖物 九日
九十五 供醴酒 同日
九十七 御體御卜 十日
九十九 神今食 同日
百一 祇園御霊會 十四日

八十七 左右近馬場騎射
八十九 有無日 廿五日
九十一 賜給

百三 節折 三十日
百五 鎮火祭 同日
百七 施米

七月

百九 廣瀬龍田祭
百十一 乞巧奠 四日
百十三 盂蘭盆 七日
百十五 新年穀奉幣 十四日

八月

百十七 八朔風俗
百十九 大祓
百二十一 道饗祭 同日
百二十三 雷鳴陣 同日
百二十五 七日御節供
百二十七 文殊會 八日
百二十九 相撲
百三十一 仁王會
百三十三 釋奠 上丁日

百十九 小野祭 四日
百廿一 石清水放生會 十五日
百廿三 季御讀經
百廿四 九月
百廿四 御燈 三日
百廿六 重陽宴 九日
百廿八 撰虫
百廿八 十月
百廿八 句 朔日
百三十 射場始 五日
百三十 定考 十一日
百廿二 駒牽 十六日 駒牽外、近代略退の由也
百廿五 不堪田奏 七日
百廿七 例幣 十一日
百三十 豕子餅 上亥日
百三十二 殘菊宴 五日
百三十三 興福寺法華會 六日
百三十五 大粮申文
十一月
百三十七 御贖物 一日
百三十九 御膳奏
百四十一 相嘗祭 上卯日
百四十三 山科祭 上巳日
百四十五 春日祭 同日
百四十七 當麻祭 同日
百四十九 梅宮祭 同日
百四十四 雅慶會 十日
百三十六 初雪見參
百三十八 供奉火御飯
百四十 朔旦冬至
百四十二 宗像祭 同日
百四十四 平野祭 上申日
百四十六 杜本祭 同日
百四十八 卒門祭 上酉日
百五十 當宗祭 同日

百五十一 中山祭 閏日
百五十二 大原野祭 中子日
百五十五 五節 閏日 廿日二度時八上西刻或下西日用也
百五十七 新嘗會 中卯日
百五十九 春日祭 中申日
百六十一 日吉源時祭 閏日
十二月
百六十三 供巳火御飯 一日
百六十五 國巳 三日
百六十七 月次祭神今食 十日
百五十一 松尾祭 閏日
百五十四 園并韓神祭 中丑日
百五十六 鎮魂祭 中寅日
百五十八 豐明節會 中辰日
百六十 日吉祭 閏日
百六十二 賀茂源時祭 下酉日
百六十四 大神祭 上卯日
百六十六 御禮御卜奏 十日
百六十八 御佛名 十九日
百六十九 御髮上 下午日
百七十 立太平童子像 大寅日
百七十一 荷茶 擬者 閏日
百七十二 着鉄改
百七十三 内侍所御神樂 三十日
百七十四 御贖物
百七十五 大祓 閏日
百七十六 進僧 三十日

公事根源八一條禪閤兼良公二十一歲時撰セラル　奥書ニ云應永二十九年正月十二日書之

畢　偏爲愚兒也小見有憚　内大臣　又一本奥書ニ云右根源抄依柳營御所望後成恩寺關白兼良公子時生年十九歲不被見一紙之書被書進之　此柳營者足利四代長傳院義量也　古筆屏風傳云兼良公一条太政大臣從一位關白准三宮號後成恩寺也經嗣公息博聞强記無書而不讀讀無不通故倭漢之學識不愧古人自負才氣無歇學之師承將讀古今集慨然嘆曰一閲之市必立之乎一卷之書必立之師況歌道之奥乎竟髫齔就冷泉持爲卿學三代集之祕訣乃賜手書曰自今而可爲當家之羽翼云云其手書至今存家凡所著四書童子訓日本紀纂疏元亨釋書註文明一統記歌林良材花鳥餘情源氏祕訣源氏年立源氏和字抄古今祕抄新式今案追加重編職原抄令抄江次第註讓位即位御禊大嘗會和字抄公事根源抄除官雜例愚見抄連珠合璧東齋隨筆樵談治要關藤川記雲居春筆之慰尺素往來世諺問答等此外雜著不可總舉今記大綱而已

公事根源

正月　一　四方祭　一日

四方祭といふ事は元正寅の時小兒べ殿皇

屬星を唱へ天地四方山陵に奉る

年災をも拂ひ寶祚をも祈り奉る儀

○江次第清涼殿乃東階乃東の方に御屏風を立て

其上に御屏風八帖大宋或四帖云云不可然往年月令之御屏風也近代無之

○江談抄第二云諸屏風等有其數所謂漢書打毬坤元録變相圖賢聖山水等御屏風等之類是也隨時立之　委事見裝束司記文歟

御屏風とて兎角二所所拜屬星座在二所

拜天地之座在東一所拜陵座見江次第後醍醐年中行事御座皆兩面短疊也

公事根源

公事○論語雍也篇云非公事未嘗至於偃之室也集註公事如飲射讀法之類

根源○韓文潢潦無根源

屬星ヲ唱○江家次第云皇上於拜屬星座端勿北向稱御屬星名字七遍是北斗七星也子年貪狼星字司命丑亥巨門星字中子寅戌祿存星字祿卯子酉文曲星字微辰申廉貞星字衛不巳未武曲星字寶大午年破軍星字持大惠子景子

山陵事延喜式諸陵寮式見合又本書荷前所參考スヘシ

寶祚○卓氏藻林二寶

祚帝位也。臣軌序云
長歷寶祚注易曰聖人
之大寶曰位
砌の字彙階甃
南淵大和國より多武峰
近所也
天地瑞祥志に天地瑞
祥志第十云師曠曰正
月朔旦四方終日之間
有雲五穀成熟無雲爲
飢也有青雲氣大熟有
疾疫赤雲氣大旱不熟
白雲氣小熟人民小不
安黑雲氣小熟多水人
民小厄黃雲氣歲大熟
人民安樂蒼白雲爲小
水若小疾蒼赤爲小旱
若小疾蒼黃爲小吉有
土霧人民疾病也

まうけ其前にすゑ本の机に置て書筆
燈なとをそなへ此所にして御祭の儀式
ありむしろを殿上に伝はなをを四方に
とりおけるまをはいの内裏仙洞摂関大臣家
なとの御祭事とは此事いはれ
まるこもみをしに和人年毎月寅の刻より天
地四方屋敷山陵をあらはせる多の御門
覚五 御記事也
の御祭はそれも潔斎といはんや
文襲江賦惟岷山之導江初發源於嶓冢注嶓冢濁酸也言發源小濁酸
ひまもなく雨を祈るとて南淵の河
三十六代
よりの幸有て四方を祭りはられい事有

生氣方色衣名當色也
○月令廣義卷之三生
氣方 正子二月丑順
氣方 輪十二月亥
○江次第云陪膳女房
調椀飯居臺盤大盛二
十坏飯二十坏大折櫃
交菓子三合給諸司女
官遣六衛府大破子十
荷[illegible]櫃交此外稱腋
菓子三十合此外稱腋
御膳自御厨子所供御
齒固具又供御藥酒等
以高坏六本獻之有餝
鏡用近江
火切

まて御なれより日本紀よの御ら祭とを
はをなをもをもをしををもをへをん
はをををを御祭をのをく孫
天地瑞祥志といふ書ふををり
二 供御藥 同日
是い元三乃祭ゑり御殿をおこなるを
と書御庚小御なりて生氣乃文を御
衣をを御祭乃御ゑを御ゑのをふかを
めを陪膳の典侍典藥以も生氣乃ゑ祭
玉燭寶典河海抄齒固事江次第抄云齒謂人年齡也齒固者延年固齡之義也
齒固事河海抄詳也
御厨子所乃御齒固を法を

屠蘇○聞書巻之三十八風俗志屠蘇酒華陀與魏武帝方也○四時纂要曰屠蘇思邈菴名屠絶鬼氣蘇醒人魂

小兒ヨリ么○四民月令云正旦進酒次第賞從小起以年少者起先晉海西令問董勛曰俗人正日飲酒先飲小者何也勛曰俗云小者得歲先酒賀之老者失歲故後飲酒

鬼間清涼殿ヨリ

禁秘抄云二間簾子也南間常不上有鬱簾歟之其内南北行立御厨子置御膳具

古今著聞集第十二云鬼間壁百澤王ヲカシ

事ハ昔彼間ニ鬼ヲ三ケ月鎮ヲケル故ニカヽル名事トハ申ツタヘモタヾカヽ說ヲレ

東戸向テ么○千金方云於東向戸中飲之

後取○名目抄云後取元三御藥除夜藏人定其人元日四位二日五位三日六位

交名切紙○江次第云

後取
元日 某朝臣
二日 某
三日 某

廣一寸八分高一寸
元日四位
二日五位
三日六位
並用高戸者必然
代不

令婦義人役遣ちく典侍次男小令婦まい

里ゝて藥子ゝて小女ゝいもゝ嬢をゝ

をゝとゝ先ゝく乾用新事ゝ屠蘇ゝ小兒

ゝりむゝゝいゝ年又ゝは長ゝ小女

を撰てゝ門のゝ藥ゝ一人ゝ

鬼ゝ問ゝゝすゝみくゝゝ法ゝ悔ゝ

小ゝゝ女官典藥をめゝて御藥ゝ

ゝ女官分御酒令嘗藥子

ゝ一獻小ゝ屠蘇酒小ゝ藥ゝ

のゝ次小銀器ゝ典藥須ゝ

いゝ小ゝ屠蘇ゝ

御殿の南ノ戸ゝ入ゝ御ゝ

東ゝ戸ゝ

御膳持ゝ

小御ゝ

ゝ屠蘇ゝ取ゝ人ゝ

江次第云高戸ヨリ屠蘇ヲ取ル

ゝ屠蘇ゝ取ゝ人ゝ

四位二日ゝ位ゝ

里ゝ日奉ゝ人ゝ交名ゝ

北壁角柱間西第三柱間柱中

ゝ殿ゝ柱ゝ

ゝ散ゝ

二献之間

大根（ダイコン） ○江次第云、多給大根、正月人多精進之故歟。式給串刺、裏書、女蔵人各扇上賜之後取。

度嶂散 ○延喜式注、度嶂散、辟嶂山悪気。

御薬（ミクスリ） 御膏薬ト書、名ヲ忌テ多ク薬ト号也。千瘡膏ト云カウヤク也。○江次第云、主上取之、以右手無名指、令塗於左掌給由、右第四指是薬師印相也。乃用之。裏書云、後醍醐院抄、傳御額並耳裏。

一人是ヲナメレハ 千金方云、一人飲一家無疫、一家飲一里無疫。

人に給ふ事有。大根（ダイコ）をとらふ女蔵人（ニヨクラウド）給はりて
扇にうくる。是をもちゐる事は元日は人々精進のゆへな
りとぞ。江次第にみえたり。三献に度嶂散と云
（荊楚歳時記宗懍作、正月七日、以赤豆七枚辟瘟気。又云、梁有天下、不食葷、荊自此不復食雞子。○今案、元日精進、是又梁武帝好佛之遺風ならん）
ものを供す。御薬の儀式は三ヶ日なり。第三日に
御くすりを奉る。銀器にへたり。無名指（ムメイシ）に
付て御額并に御耳（ミ）のうらにぬらせ給ふ。右
の第四の指をもちゐらるゝ事は薬師の
印相（イン）にて侍るとかや。此御薬の儀式は人王十二代
景行天皇の御宇に始まれりと云々。一人
是をのめば一家病なし。一家に

是をのめば一里に病なしといへり。ふるめでた
き効験侍れば年のはじめに是をなすにや

三 供御節供（クゴセツク） 同日

是も三ヶ日の事也。寛平（宇多天皇年號）二年二月の比より院
には別当善といふ人におほせられて毎年
調進せらる。諸院宮の御節供も是にな
ずらへらる。異事（コト）は侍らずとぞ

四 朝賀（テウガ） 同日

是を拝賀ともいふなり。辰の時に天皇大極殿に
行幸なりて行幸の儀也。群臣皆礼服（ライフク）を着

鼓ヲ鉦ヲ之○元明天皇八年春正月甲申朔天皇御大極殿受朝皇太子始加禮服拜朝陸奥出羽蝦夷并南島奄美夜久度感信覺球美等來朝各貢方物其儀朱雀門左右陣列鼓吹騎兵元會元日用鉦鼓自是始矣類聚國史七十一

近仗○江次第抄云近仗謂近衛次將也

橿原宮 祕傍山東南都ヲ立タヽヒし時皇居名也

日本紀見ル○日本紀云見ル舊事紀見ル○舊事本紀五大歲辛酉正月庚辰朔宇摩志麻治命先獻天瑞宗竪

てさなすゝ御即位乃儀式小同小異雜
なゝとあり開門なゝありてめしれ鼓を
うゝしまは群臣列して門よへ天子の
御座小はりなせへい兵庫寮紙張り執
翳いて帳張八字小明を迎仗警蹕せ
うし尚書上宣奏事畢ゝ典儀奉勅と謂少納言也
なゝ群臣拜舞奏賀奏瑞して二人乃右座
小はみく祝ア事也芝い云ふ此用ありき
奏瑞はあること國ゝりアはなれを紀
て今日芝を奏はるる也其時群臣奉祿を次小

神權以奉矣謂五十櫛亦云今水制繞於布都主劒大神奉齋殿內即藏天璽瑞寶以爲天皇鎮祭之時天皇寵異特甚詔曰近宿殿內矣因号足尾其足尾之号自此而始矣

同書ニ ノタリ○日本書紀二十五大化二年正月甲子朝賀正禮畢即宣改新之詔

古ハ大極殿モヤリ方也。類聚國史七十一歲時部天平十四年春正月丁未朔百官朝賀爲大極殿未成權造四阿殿於與受朝爲面上榎并兩氏始樹楯槍○左經記云案大極殿體非榎并

舞踊はれいは武宮第歲は旗をあるもいと同
あゝき儀式ゝも也神武天皇元年正月一百樞
原の宮城なゝ位小はり分給ふる
物宇摩志麻治命天瑞宗奏給ふ物ゝ日
本紀小見ゝ芝なゝとも始ゝもアへき
又孝德天皇乃御宇大化二年正月一日御
門おりて事はり問ゝ書小の分ゝり
芝ゝ誠乃朝儀といアへゝ芝紙小六十六代
一条院御ゝ後いありしも不記又記漏小
芝不見ゝ紀ゝ大極殿も有ゝ也今小

人王第一代

日本紀也

七十代後冷泉院御宇大極殿炎上

堂所謂廟作也諸寺金
堂皆廟作也

君子為君子。大明無為照至公無私親

小朝拜（コテウハイ）汁うして成小弓

五　小朝拜（或コテウハイ）　同日

此事いにしへ治下ごろうして元日ばかりにて天子を
拜し奉らべきこと一戸侯ばかりなれば公事小
て行はれさうして行延（ヱン）乃為にも行はれ神
事佛事にも此とさう侯い是い私乃礼也君臣
私なりと云文を不宜とすとして延喜乃御宇小
勅ならく延喜六年より天長時平云小侯く
留さう侯ひ也抑拜賀百官悉あるとも
いへども小朝拜は左右ばかりの也百官と

（大選四十一年周朝法朝廷天子也）

六代

ばかりにて小朝拜私あるよ侯ありとて
留させ侯ものは小治下を元正乃日君臣
有り奉侯事をもきりぶ戸侯ばかりは四十九
多小又とも法ならく侯乃侯侯也其於延
喜乃多小治下乃法侯ばかりか
も當代のみこと達い拜礼（ライ）乃儀式ありて
皇子
也治子礼道はあひとる面ならいそう
治下礼法のこと侯いと侯ばかり礼へきとして明
ものばかり侯ばかりは貞観乃御記乃侯ば侯
多り関白大臣ばかりの下ばかりへきと奉侯儀として

【舞踏】○拾芥中末舞踏事　再拝置笏立左右左再拝左右左　小拝　取笏立再拝
【元日節會】○江次第云元日宴會より
【内弁】○江次第抄第一大臣於承明門内弁備諸事故曰内弁第二大臣於門外弁備諸事故曰外弁
【一上】○職原抄云官中事一向左大臣統領之故云一上関白之人為左大臣時右大臣行一上事是依関白兼摂也○同下云是執柄依執天下之政無其暇仍官中諸公事併與奪次大臣之故以次人為一上也

清涼殿の東庭(トウテイ)に四位五位六位にいたるまで殿上の者残らず拝し舞踏する威儀してまゐりて御拝ある事にて、とくおこなはれ下として今は猶(ミカフ)経の世をへて無名門(ミミヤウモン)の前より弓場殿(ユバドノ)に立給ふなりて上首(シユ)の人蔵人(クラウド)頭をもて奏聞を其後は御門は出御なりて小朝拝の儀式給なり節会とゞまるによりて小朝拝とはいはれ朝賀有年は行はるまじき事なりけんかし

六　元日節會　同日

其儀小朝拝をもてかゝれば内弁の大臣陣の座に

○江次第云内弁召外記問諸司具不又召外任奏付蔵人奏之入御令候列諸司奏可付内侍所由仰次被奏　日晩若雨　儀若諸司中務省御暦不具存也奏宮内省氷様奏　氷有様奏　也以下略此腹赤奏　若遭期不参七日奏　之日奏若当卯日卯杖奏等也　奏御卯杖外記

【七曜御暦】○延喜式中務省式云其陰陽寮官人率陰陽寮入自建春門進七曜御暦輔以上一人置案退其詞曰中務省奏陰陽寮供奉留某年七曜御暦進　良久　申賜止奏　無勅者　[illegible]

【氷様】○江次第抄云宮

つく事を給ふ「上」小忌(ヲミ)もして位次(ヰジ)の大臣なるは内弁(ナイベン)小忌(コイミ)への座より諸職事(シキジ)を召て卿を召也大舎人を召はじめ事ありけ一(イチ)の上卿人はまゐりてとゞまりて後は陣の座に座して蔵人外記(ゲキ)を召して外任(ゲニン)奏をたてまつれ

江次第抄云外任奏者諸国守介等或任符未給或雖給任符未赴国或為済権政入京朝参須節会之時外記注其人名事未給之前就内弁奏聞返給之時仰可候列之由」

給は外へよりて蔵人内侍に付て奏聞をも是は御門御覧じて返給ふ又諸司奏は内侍所に

「○諸司ヨリ物ヲタテマツル　ーー云白馬節會所参考スヘシ

小忌のまゝ候ひて諸奏とはいはずして庭に進みて奏し参らするや諸司奏とは

内省氷様長主氷司奏之此司隷宮内省氷様者氷室厚薄寸法以紙石写其様奏之
【宮内省式】延喜式宮内省式云凡蔵氷之處收氷多少及氷厚薄等處具録元日付臣未奏之前省輔已上将本司入奏其詞曰宮内省申久主水司諸今年收留太氷合若干處氷若干室厚若干寸已下若干寸已上並自去年若干室減自去年若干室凡太室殊奏留事申給人太宰府進留腹赤乃御贄一隻長若干尺進平謹久申給登申
【氷池風神】の主水司式

七曜の御暦御腹赤の奏なとの事也七曜の御暦は中務省より奉る日月火水木金土の此七曜をしるしたる暦なり氷様は宮内省より奉れる去年氷をおさめたる所の様を今日節会の次に奏する事なり厚さうすさいふ程の事を奏するなりとそ二寸にも奏して其年のためしとしてよい石の事のよしを奏するなり延喜式にも氷池風神の祭なと侍り氷のむろくわらは聖代の験氷の封ぬは凶年にて侍るとそ氷の御祈とて

釋家官班記下ニ凌 御祈トアリ

云氷池風神九所祭山城國五所大和國一所河内國一所近江國一所丹波國一所
〇勸修寺池山城國五所之随一也名所方角抄云小野池勸修寺ノ池ヲイヘリ延喜ノ御宇氷池ト云也

大法秘法を行はれしや今もよく氷て国あつくなりしかは此奏ある也昔仁徳天皇の御宇六十二年に額田大中彦皇子闘鶏と云所に猟し給ふに山の中の野中を見くたし給へは菴を作りたる様なる所あり人をつかはして見せ給ふに窖也と申ける時かの山の主に問給へは人をして申けるは氷室なりと申す皇子是はいかにしておきて夏にいたるまて消ぬそとのたまへは土を一丈ほりて草をもて上に葺て

十六代

闘鶏稲置大山主也

茅萱なりしに厚く御覧して永世寵ありて小永
ていうなる大畢りしとけ世に比類なく
熟用ふりて世に
と仁德の聖世御門小奉給給られいなれめ
形すすの小殿感すしして度ますしてみなる
もの給りは永代なり姫なりこと給事
給しに光代さ給く國〻而〻小氷室を
置れ給しなりまして腹赤の贄として魚を流
樂り奉給なり昔い樂く年貢なに
供しまりて腹赤の食様として多いさて

（年中行事一ノ御贄ノ事アリ）

（日本書紀十巻）

宇土郡。肥後國風土記云玉名郡長濱濱郡真昔者大足彦天皇詔球磨贈於選駕之時泊御船於濱而又御船左右游魚多之棹人古備國朝勝見以釣之多有所獲即獻天皇勅曰所獻之魚此爲何魚朝勝見奏申未解其名正似鱗魚耳壓御覽曰俗見多物郎云介陪佐介今所獻魚甚此多有可謂介陪魚今謂介陪魚其緣也

宣陽殿元子。江次第云天皇著御帳宇倚子近代稱警內舞者宣陽殿元子內侍所東廂內雜起殿後音稱唯經宣

たりて食たり景行天皇の御宇
（肥後國ニ云ヒ）
流樂の國宇土の郡長濱にて海人是を釣
奉る其後聖武天皇の御時天平十年
（四十五代）
十四日大宰府より是を奉りて
年毎に年貢小供と魚きさし
（十二代）
なる腹赤と魚の事なり
（七曜御暦氷様腹赤贄也）
此三文を奉るなり諸司奉るは成命
（當日平明令土殿寮掃除南庭云云）
御門南殿小渡御なりて御
（紫宸殿名鉄唐令云烏皮靴赤皮靴者文字亦作鞾和名化乃久都）
帳の内小法なる世御
（紫宸殿名鉄唐令云烏皮靴赤皮靴者文字亦作鞾和名化乃久都）
なりて靴と
（紫宸殿名鉄唐令云烏皮靴赤皮靴者文字亦作鞾和名化乃久都）
いく是なりさき小諸に

陽殿壇上北行出自新
廊東第二間雖行到左
近陣南頭謝座再拜頓
向北一拜次再拜次一
拜右廻廊軒廊并東南
等入自南一間母屋
東第一間西進計座程
著之再儀於元子前謝
座帶劍人南面行一兩
步為不令開門書名奉
劍蔵也
近衛八人開承明門左右
殿門左右兵衛開建
礼門司分居内辯召舎
人三人大舎人四人同音
稱唯於承明門外云云
慢外辯之
謝座○江次第抄云謝
座者内弼大臣蒙昇殿
著座之詔命而先致拜
謝之礼也先後一揖者
起居之節再拜者拜天
子之意也知足院關白
被命云乾是天位也拜
天者是拜天子之儀也
開門○江次第抄云南
殿正面門承明門也左
右腋門長樂永安門也
建礼門相當承明門也
時百官皆在門外至是
命開門者令群臣放入
也（シキイニ）○江次第抄
云著可昇著堂上所敷
之座也引聲召之時曰
敷尹○江次第云内辯
宣侍座引合又云群臣
再拜謝之謝座堂上著
座謝之拜也○又云酒
正授空盞於貫首人舉
臣再拜酒正歸間起如
上謂之謝酒飲酒謝之
拜也（ヒタヒ）○倭名
抄十六飯餅類黏臍辯
油飾名也黏色立成
作似人腹臍
也上女庶反下音齊○
同雜饌唐韻云
畢羅二音

外辯小法く長樂門乃東乃腋なりまいし大門
とて乃事史合法代かいもんぎせ所なり
屋乃やとかまへてせくなり内弁宣陽殿乃元
子乃位とせ後謝座せ殿まとく階ぜ罪て
堂とせ元子乃法く此乃作法進退ぞ内辯
乃大事とて家くせ以ぞ能実なしくけるなめる
開門を御く舎人二音めとと大舎人四人唯
次第抄云召舎人者為名少納言也
文選四十六注故實先王之道也
秀少納云小法ぞ当示ぞは少納云諸ひをめと
次第抄少納言掌宣傳小事也
次第小の辯乃上者らしまとみく悪ひらを
ひく為座小列立ぞ親王乃後小大臣と後ふ
異位重行體

大納云とせ後小三位中納云其後小四位宰相
立ぞ二位中納言乃示ぞ大納言乃示ぞ三位
宰相乃中納言法示ぞ法示ぞ後ぞ辯
立宮くく後内辯まきめん代作とまき次人乃
敷居ぞ宮くく後ぞ座小めくく云心な
御膳を乃ぞ殿ぞ乃御膳供八盤諸臣諸仗共立供次ぞ膳
内膳入自月華門供御膳供八
乃を供とを後やくく膳乃御膳代供を大座
御膳乃ぞ乃ぞ乃名はれども其密心
倭名抄今按俗説梅枝饌餅桂心黏臍餅饌錢子團喜餅之八種
黏臍饌饌餅桂心なく法ぞ

字亦作蠻螺
俗云比知良餅也。
同國餅四聲字疏云鍋
者與蝸同俗云國餅今
案鍋者食也爲餅名者
詩餅名煎麵作蝸虫形
也。

案餅　江次第抄
云麵如素麵也

國栖奏　○宮内式云凡
諸節會吉野國栖獻御
贄奏歌曲毎節以十七
人爲定國栖十二人笛
二人在山城吉野國栖
國綴喜郡
川ヨリ。日本紀云然自
此之後厥給定以獻上
毛其土毛者栗菌及年
魚之類焉

江次第抄云酒
則邪風
去皮膚三十云云稱多說
今略之御酒勅使者給
酒於侍從慥之勅使也
勅使參議奉勅而撰侍
從四人爲勅使也

五樂各二曲　○後醍醐
天皇年中行事云樂ア
リ日月華門ヨリ左右樂
人春庭樂ヲ奏ノ馳道ニ
ヌヽ左右各二曲萬歲樂
地久賀殿長保樂ナ也
臨時勅ヨリテ此比各三
曲モヨリ大方近來此事ナシ
當代樂ヲヨリテコサル也

宣命　正月一日宣命案
天皇我詔旨良萬官人
命乎衆諸聞食宜今日
波正月朔日乃豐樂聞

物也銀鉢素餅いめじかきはたれい酒も奥の人
江次第抄云一獻素餅也
乳酒しわ三獻乃儀ゑ一獻ゑ國栖奇沼と奏と也
國栖奏歌笛於承明門外奏之
日本書紀十
を吉野乃國樔人沼事なり笛神天皇十九
年十月小吉野乃宮小行幸ゑて付國栖人
奏く東酒伐奉りく奇とうひ奏る賞
歌日本紀ニ
と人山沼ゑを元くうひ又くれを奏く
蝦蟆
名ゑは毛淵と名ゑ出きく上味ゑて食る
國栖川ヨリ今ヨリ吉野ヨリ五日路奥也
とうや吉野ゑ河のうつみく岩出きりく岩
出きりゑれ不河と名毎ゑ出る其沼
小素物と事ゑ不河と名毎ゑ出る其沼

常み參て年魚獻れ獻伐獻ゑ
今乃國栖乃奏と奇沼ひ笛伐ゑ
なりし吉野ゑ年始毎ゑ
心なり二獻小御酒勅使乃儀ゑ三獻
大夫達不伴當
ゑ五樂各二曲伐奉と後宮命ゑ
給宣命
奉臣兩段再拜
ゑ
ゑ事ゑ
ゑ
不及其上ゑ
御ゑ作此帝
なりて親王百官小酒と給く賜ゑ
四十代
持統天皇四年正月小朔伐内裏小召く

食頃日今在司又職毛
寒介依々御被賜給久
宣

宴會ト書テ　仁德天皇紀ニ
宴會ト書テトヨノアカリヒ

神武天皇御宇　日本紀
神武天皇紀天皇以其
酒宴班賜軍卒

續日本紀寶龜四年正
月丁丑朔宴五位已上
於內裏賜祿
酒ニ篇云賞賜也

とよれあるもとくいりゐ給と書くいこ
ふ所あるもとくこそ侍りたれ
名ことはるは畫の節會は正月中辰日
神武天皇乃御宇にも酒を給はるとあ
酒を給はる事は日本紀に見たり是
とも事は發つまくいかへきたれ光仁天皇
寶龜四年は春のいはは給ふ小物と海
代給ひ今とまりはしらして事を
とも祿を給事を
內侍所御供　同日

三種神寶　長ケ五テ　○神代卷下天照大神乃賜天津彦彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物

我ヲ見ルコトヲ　○神代下天照大神持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡

見ゆ所月小侍ちうあく也寛平年中小侍
ちうあく此內侍所と申ゆ三種乃神器乃其一
也今年振神代乃事とは天照太神と天
照大神乃御子とは給ふ時石凝姥と申
神に給ふ鏡を給ふ時神乃御子とは給ふ
と八咫乃鏡と申給ふ後地神第三代
天津彦々火瓊々杵尊と申ふ人乃國と
と成給ふ天乃給ふ時天照大神と
御鏡給ふ三種乃神寶給ふ事給ふ此
御鏡給ふ我を見るごとくに拜給ふ也

五十鈴川今内宮守治河也

御記ハ天徳御記也

御記曰天徳四年九月二十四日鑒求温明殿所納之神霊鏡并大刀契等中時重晩朝臣來申言瓦上有鏡一面其鏡徑八寸許頭雖有小瑕専無損圓規并蔕等甚分明見之者無不驚感釋日本紀第七引之

給ひし也代〻の御門同しく寳物とし給ひしに
人皇第十代崇神天皇の御時常に御鏡の神
威に恐れて神代より傳はりし御鏡をは伊
勢国五十鈴の川上にあかめ奉らるる今の
伊勢の皇太神宮なりさて新造の御鏡（内宮ノ事也）
をは皇居に留め奉りて温明殿に天皇の御守（十代）
とは漸々神威を恐させ給ひて別所にあかめ奉
らる温明殿是なり村上天皇の御宇天徳（六十二代）
の焼亡に温明殿に此御鏡灰の中に少しも（四年九月廿三日庚申夜）
焼損せる事なかりし由御記にのせられし

なり有説に神鏡南殿の桜の木に飛かゝりたりしを
小野宮関白の袖にうつし奉りしと侍（実頼公）
れともこの事は鏡をもえ出しと村上の御記にみえ
實録にはやうなるらん壽永の比一條（二年後落京）
のはしめ帝を懐き奉りて西国に落ちさせ（三年後文治元年三月廿四日）
給ひし時も此御鏡もろともにおはし
ましけるを今に至りて神器
[illegible]
[illegible]
[illegible]

小野宮関白袖○禁秘抄云天徳焼亡飛懸南殿桜小野宮大臣実頼受袖也

二位尼○山槐記云平時子清盛室懐安徳天皇没于海

白川宮○

主上御冠ハ必穴アケズ○江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故號御云帝主冠巾子左右有穴是內侍所御同殿之時主上夜不能放冠給御眠之時御冠墮落仍以挿頭刺巾子自巾子穴通御髮也

白川院○禁秘御抄云白河院御宇仰曰內侍所神鏡者飛出欲上天而女官懸唐衣神奉引留依此因緣女官奉守護

主上御冠をおとさせ給ふまじき事にて御冠にあなをあけて笄をさしてゆひつけらるゝを主上の御冠には穴をあけずして落べき事なれば内侍所より出させる女官に渡して候なり白川院禁中の内侍所の神鏡をひらかせ給ふに女官を召れ女官を召して…（同殿ニ御座サレズ内侍所ニオカセラルヽ也）（七十二代）

内裏觸穢○禁秘抄觸穢時恒例供神物先例不同寛治八年陽明門院崩之時無沙汰去年内大臣穢及禁中時供之今度諸社祭雖延引猶有供物但天養止有例

其日穢ありければ是は毎年の事なれば日次の善悪によらず内裏觸穢の時も猶供へらるゝ例ありとて先規なし事もいたりなり

供若水（儀式帳新菜嘉饌又若水新水也）立春日

若水といふ事は去年御生氣の方の井を定めて封じて人にくまさず立春日主水司内裏に奉るを朝餉にて是をきこしめす也是をのぞきて白色を…年中の邪氣をのぞくといふ心也（除心也）

年中邪氣ヲノゾク○本草云新汲水ハ却邪調中下氣氣並宜飲之○本草新汲水ハ毎朝一番ニ汲タル水也

[注釈] ○大江氏太宰帥也○江次第抄云江帥次第云供御若水之時有咒萬歳不變水急急如律令云云

[後院] ○拾芥抄中末後院四町五條坊門南五條北大宮東堀川西○江次第八裏書云後院謂冷泉院来雀院等

○源氏物語若菜巻河海抄云十二種若菜

薺 芹 荇
蒡 菁 蓼 蓬 水
蓼 水雲 芝 蕗

此中蕗松葉説アリ白川院松蕗人アリ大外記師遠

ト仰アリ大外記師遠八小大根由申ル其説ヲ用ヒル也由見蕗記

師遠○江談抄第二云大外記師遠諸道兼學者歟今世尤物也能達者不劣中古之博士歟○職原大炊頭下近代大外記中原師遠子孫相傳之温職中尤貴腴也

[コホ子] ○和名抄温菘雀高錦食經云温菘音和名古保奈味辛大温無毒者也

[正月七日] 歳時記云正月七日為人日沈七種菜羹

九 供御若菜 上子日

[注釈] 御疑歳時記云舊説正月毛且薄食雑説食雑説食雑新菜

延喜十一年正月七日内後院より七種乃若菜を供奉る也寛平年中より始まる事ホ

村上天皇

安子藤原氏師輔公女也

[式部卿] 兼明親王延喜皇子也

[注釈] 式部卿兼明親王延喜皇子也

[繁蕪] 竹 葵

[注釈] 和名抄侯と若松溫菘誤也

[後院御所] 御所

[黄花菊] 茨菰龍芝草 鶴ハ

子日　○拾芥上本ニ云正月子日登岳何耶傳ニ云正月子日登岳遠望四方得陰陽静気除煩悩之術也十節記
○扶桑略記宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行北野雲林院云云
○菅家文草第六扈従雲林院不勝感歎聊叙所観序云予亦嘗聞于故老曰上陽子日野遊厭老
○又日倚松樹以摩腰習風霜之難犯也和菜羹而啜口期気味之克調也
圓融院ノ子日ヲせさせ給フ　○十訓抄云圓融院ノ子日せさせ給テ紫野ニ御幸有ケル二年此所ニテ子日せさせ給ヒケル事ヲ思ヒ出テ行成卿カクヨミケル
ヲクレシト常ノミユキハイソギシヲ煙ニソハヌ旅ノ悲シキ出家ミテハナケレトモ思ヒ入タル志深クオホユ
日本紀ニ云　○日本紀三十持統天皇三年正月乙卯大学寮献杖八十枚
○卯日タテマツル杖故ウツエト云文徳實録云六剛卯杖ト書ス漢書王莽傳中云正月剛卯金刀之利服虔日剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金

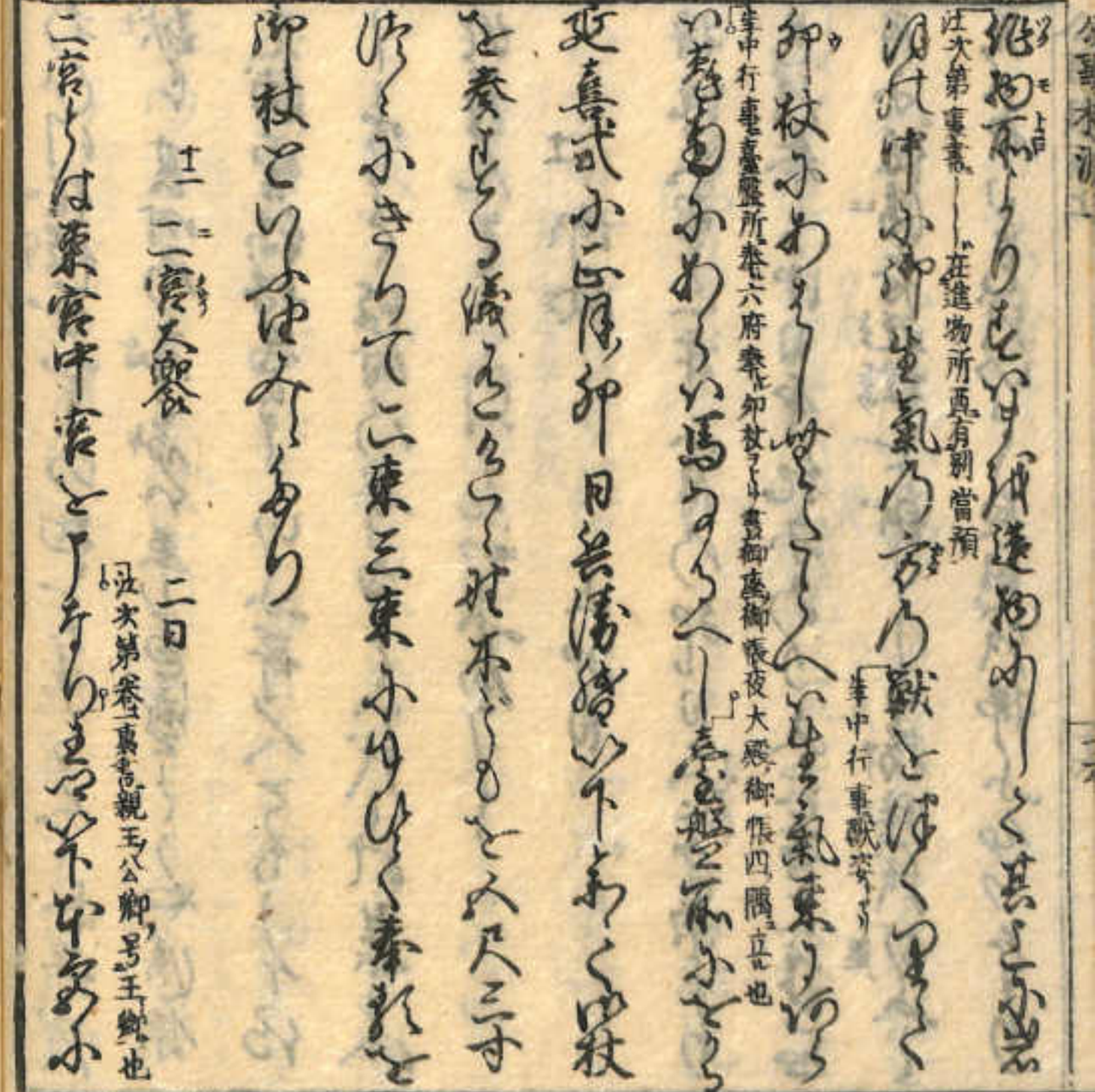
十　子日遊

是もはしめて野へ出て子日をするとて松を
引事也宇多(六十代)院圓融(六十四代)院三条(六十七代)院なとの御時
にも此御遊ありけるにや中にも圓融院
の子日を皆させ給ふ事は寛和元年二月
十三日の事也院の御車也しか紫野(見小野宮右大臣記)
をさして成て上達部は御馬にて供奉せられたり
大臣公卿は直衣にて殿上人は布衣なり
幄の屋をまうけて懐紙をひかへられし小庭
にめして小松の枝ひしと拾種しつらひ詠歌
わひけり檜破子やうの物をもたせて人々和歌を
献じ其時の序は平兼盛ぞかけるや清原
元輔曾禰好忠なといふ歌人ともめして侍
しに好忠の事は今の代まで集まるの
笑くさとなりにけるにや

十一　御杖　上卯日

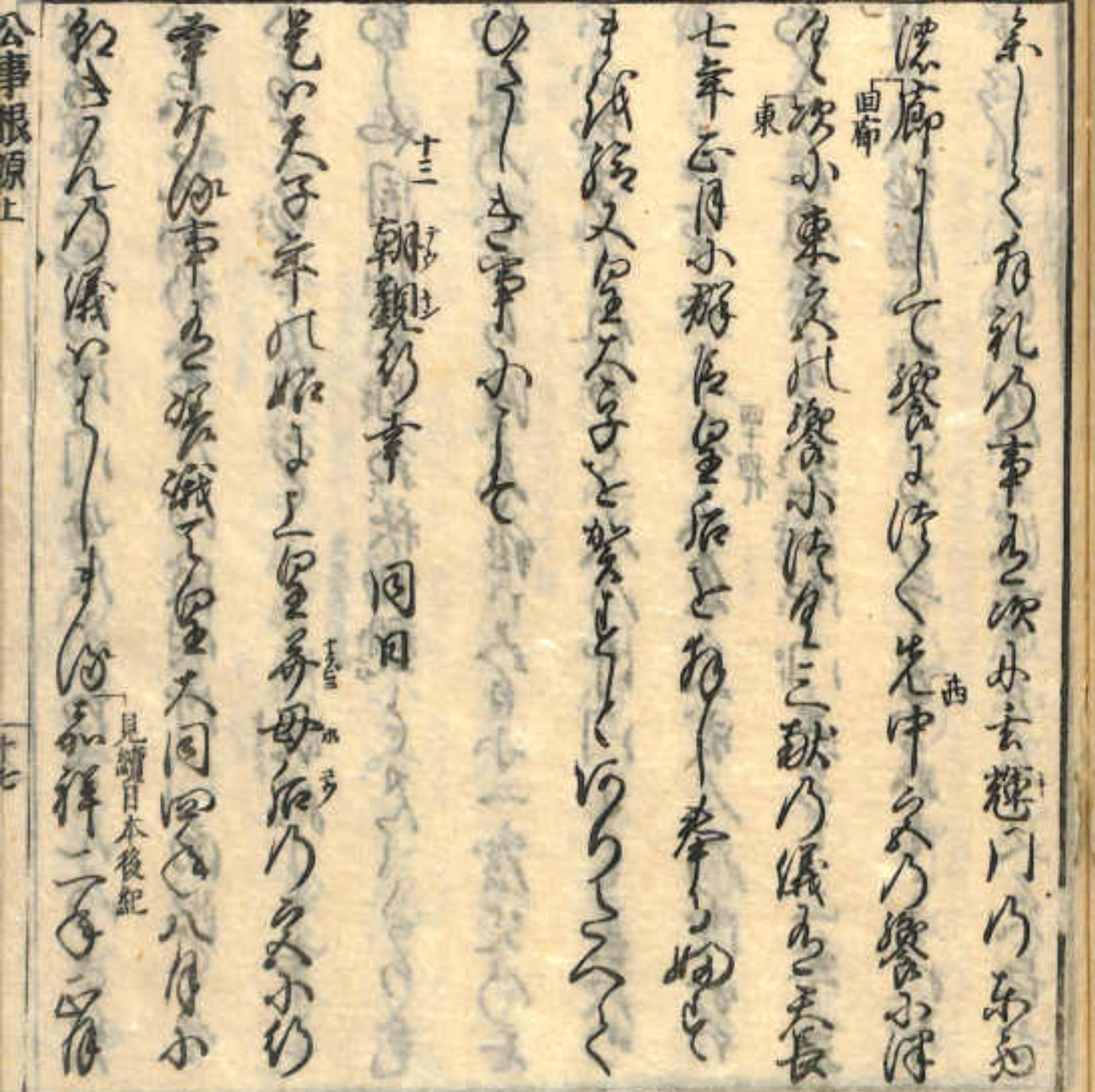
持統天皇三年正月乃卯日大学寮より
是を奉る日本紀にあり又仁寿二年正
月に諸衛府卯杖を献して邪魅を避と
見えたり是は卯杖にて悪鬼を払ふならひなり

成用桃著革帶佩之今
有玉在者銘其一面曰
正月剛卯云
精題○論衛訶鬼篇鬼
者老物精也夫物精也
夫其精爲人
邑色木上 延喜式○左
兵衛府式云凡正月上
卯督以下兵衛已上各
執御杖一束次第參入
立定位一人進奏其詞
曰左右兵衛府申正月
能上仰日能御杖仕奉
良久 進登 申給 波久 申
勅曰置之醫師已上共
稱唯獻畢以次退其御
杖槇榿三束一株爲束木瓜
三束比比良木三束牟
保已三束黑木三束桃
木三束梅木二束已上二株爲束



樂木六束四株爲東中宮東
宮別槇榿一束二株爲東木
瓜二束比比良木二束
牟保已一束黑木二束
桃木三束梅木二束椿
二束並各長五尺三寸
○裏書云玄蘭門北面
正中之門也謂之北廊
玄蘭門西掖著中宮饗
東掖著東宮饗

同日○拾芥云二日朝
儀行幸 吉日



【周禮】周禮春官大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰覲冬見曰遇時見曰會殷見曰同此六禮者以諸侯見王爲文

【漢高祖】史記高祖本紀六年高祖五日一朝太公如家人父子禮太公家令説太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎門卻行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我亂天下法於是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令言賜金五百斤

はるよし仁明乃御門母后に朝きん乃はじめ
冷泉院に朝幸ありける時御門南殿より御
こしにて出させ給ふとき乃しく警蹕し事を
ゆるしゝや周禮に春日朝秋日覲とかんかへられ也
朝覲乃名ある漢高祖は五日に一度父乃太
公に朝きあそはしける人乃御門にも甚ためし
し給ふ事にてそ又東宮成人乃御時は
朝きん乃義あり元正御門養老二年正
月に大極殿に出御ありて東宮をまうけれは
見給ふことは後に清事なり又天長十

四十四代

年三月に淳和御門紫宸殿に出御ありて
東宮朝覲乃拝舞乃後御衣を給
ふ東宮是をたまはりて拝舞してまかり給
儀式とかや成人乃後かくのことしと國史に注
せり是恒貞親王乃東宮乃時乃事なり昔
文王の世子たりしとき王季に朝せらる
事日に三度なりと礼記にみえたる是
なもそれ東宮朝きん乃例とも申へきを

五十三代

文王世子篇

【國史】此國史ハ續日本後紀也

【文王ノ世子タリシ】禮記文王世子篇云文王之爲世子朝於王季日三雞初鳴而衣服至於寢門外問内豎之御者曰今日安否何如内豎曰安文王乃喜及日中又至亦如之及暮又至亦如之

○桐壺巻河海抄上達部殿上人也堂上ノ總名也

西　臨時客　同日

是は摂政関白家に大臣乃外大臣以下上

○大臣家大饗見江次第二
○裏書云初任大饗於庇行之毎年大饗於母屋行之
朱器 臺盤 ○裏書云藤氏長者朱器臺盤閑院左大臣冬嗣公御物在勧学院長者初任之時渡之正月大饗用此器也自餘大臣大饗用赤木黒柿机様器等

達部を招請してあそぶ行事也定まれる
公卿ももあ羅ずは蘇甘栗よりやへ
方にて母屋の大饗は年ごとに行はる（身屋とも書）（年ごとの心也）
しかりし鷹飼のわたりつかまつるも其事（入道西殿門渡庭中犬飼相具）
○江次第云鷹飼錦帽子　紫纈狩衣　白布袴　壺脛巾　淺履　熊行縢
鎺鞢青鷹大刀　紅褂　左手居鷹　右手執付雉枝　犬飼　帽子　紺布狩衣
緋袴　鞢　左手引犬　右手取白木枝
よくゆきし也ハ藤氏の長者朱器臺盤をまうけ
るなり大臣家より様器の客をとうたる
なり蘇甘栗もまゐるなしとかくすれ
にての大饗は儀式にあやしくもて伝り
江次第抄先儀調安名尊者座田島被急次第調伊勢海更衣鷹飼子方蔵楽二人至意
ちみあいの御遊ありて催馬楽なとうたふ

上日 ○日本紀三十
論語 ○論語八佾篇云子貢欲去告朔之餼羊
集注告朔之禮古者天子常以季冬頒来歳十二月之朔于諸侯諸侯受而藏之祖廟月朔則以特羊告廟請而行之

摂関家にもかやうの事残りて今も侍る

圭　視告朔　三日

是ハ百官の行事上日を注しるして月毎
に天子の御覧に奉る也告朔の文とそ
なかもとしりなし也天子大極殿に出御あり
く見給天武天皇九年九月は雨ふりり（四十代）
て告朔なかりしと日本紀にあれハ此比より
前にはじまりしとハ知ぬへし論語にも家の月
毎の朔を廟に告る礼といへりそれとも
告朔といへり字ハ朔の字をかけとも心ハ給

國忌 職員令義解謂先皇崩日也○日本紀ニ國忌ヲハテト訓ス

○村上天皇醍醐天皇第四之子母皇太后藤原穩子昭宣公第三之女也

○弘徽殿後醍醐院御説後高倉院御文庫本點也ニ親範御點之源親行記此事猶口傳アリ 河海抄

その言の意ハいかやうの事なりとも凶事
式ハ一日におこなふ又四日になしたら視告朔と
かさなりぬれハかへりてかうさくと二の文字によむ
口伝にてゆるしてさくとハよむ様なり

十六 御國忌 四日

正月四日ハ村上天皇（六十二代）乃母后の御國忌也
て暦の度正月に御門の宸筆を染られ法
華経を摂して弘徽殿にして御八講乃
儀ありき其後法性寺にて毎年に御八講ハ（御諷経論義なとあり）
行はるとこし候る事なし大なる法華

○勤操和泉槇尾寺僧弘法師也八講事見元亨釋書勤操傳

議所 私云議所在日華門北披勧盃拼必納言相分勧與端内豎取瓶子 吏部記アリ

筥文 ○江次第云伴宮人五位已上歷名一巻諸司主典以上補任二巻上武官主典已上補任一巻令外官一巻諸國主典以上補任一巻上下十年労帳一巻

○江次第云盛續紙二巻於柳筥両巻七八枚 同云次叙ヿ加階者姓尸其次下一姓尸其尉是殿上一加階也○召頭藏人ヿ令撤筥之後

八講と云事ハ勤操と云僧正乃桓武天皇（五十代）（八人分法華八巻四日期之一座各講一巻名曰法華八講）
延暦十五年にはじめおこなはれしや石淵の八講と（石淵寺大和アリ）
申すも是なり其後十講三十講も同此僧正の始し
行なひ給ひける

十七 叙位 五日 近代六日

其儀大臣以下左仗の座にすゝみて先事始注
儀ありて職事に仰せて勧盃の儀式ありしかるに（江次第抄勧盃儀北山云其儀於北門前石階壇上取盃二人相對酌酒唱平擬把人揖之突左膝飲了起又酌酒畢後唱平行之如旬儀也）
近代ハ此事絶て侍るにや次に筥文とて
て執筆の大臣を召て宜陽殿にて筥文を

叙之

氏爵申文 ○江次第云 件氏爵等申文在硯箱外記史依上旨叙之件申文在硯箱入内蔵人加階叙位之間叙従下了後令殿上辨召外記勘文不入物進之毎事被問外記諸官給雖下姓叙内階自餘依姓叙内外階若有疑姓者先叙外階後日休憩叙内階朝外是朝臣姓叙外階也申持類也異内是非朝臣姓叙内階也如清原真人真人宿禰連直公藤上忌寸首玉平源藤原橘菅原大中臣高階在原官道已上不叙外階必叙内階叙畢入笥奉執政覧畢給後大辨退

次第弁御前乃座よりく関白左大臣
執筆大臣 諸関白外第一大臣
執筆めしよりて奏座小すこしてはく執筆十名
労位そうし 江次第二二十葉申文蔵帯加階之趣也 二巻二十一葉勘文可案叙人数
位を深小叙正源朝臣乃
氏爵乃座文入内一加階乃勘文入りく事行
江次第西宮云五位殿上
れく記小不及推古至十二名十二
三十四代
仁小仁大礼小礼大信小信大義小義大智小智
此十二階史今ハ
三十九代
天智天皇十四年小位正位よ爵位

衰日 ○拾芥下末生年 子午生丑未 丑未生子寅申 寅申生巳亥 卯酉生辰午 辰戌生卯酉 巳亥生寅申

と給とみくる百此叙位をもくはじめて位
し成天徳六年くるる日小始て此義ハ
曦なくふかくへ七日節会乃悩急なり
くとうあるくるまぶ事ハくうくれ今
ふ和くくみ日小ふ
なくく法意日小あ
事成法行法事高利

十六 白馬節会 七日

此節会乃事大方ハ元日なくふ
元日ハ乃頼ハ

天子貫多羅葉の翻譯

名義集二多羅葉名貫多此翻岸形如此方殺樹直而且高極高長八九十尺華如黃米子有人云一多羅樹高七仞七尺曰仞是則樹高四十九尺西域記云南印建那補羅國北不遠有多羅樹林三十餘里其葉長廣其色光潤諸國書寫莫不采用

御弓の裏書云爲射禮供天子御弓也萬葉歌曰御執乃ゆみ弓云云

一云俱舍四肘爲弓量一肘一尺八寸四肘七尺二寸爲弓量多羅葉長七尺二寸

ふしてをしなべて諸国法奏といふなり
奏は部省の奉り御奏いふ式
奏をもとめたまひしかば日ふかくなりぬ
奏は天皇の見給ふ
弓奏は作やとの給ふ
さ七尺ますらをけも七尺ますらを
部省御弓奏
江家次第拾遺萬葉集御執ノアヅサ弓上詠之御執ヘミトラシと讀之トリタ玉者通故ミタラシ也御字故弓ノコヲ上云也
御は見とをしなべて
奏をもとめたまひしかば
ここをあらいまいの陽乃嶽なりあらいの春法なり

礼記○月令云天子居青陽左个乘鸞路駕倉龍載青旂衣青衣○又云立春之日天子親帥三公九卿諸侯大夫以迎春於東郊還反賞公卿大夫於朝

天用の史記平準書云天用莫如龍索隱曰易云行天莫如龍是也地用莫如馬索隱曰易云行地莫如馬是也人用莫如醫索隱曰礼云諸侯以醫爲賓是也

毛みをして西用七日小者馬をみまとはす
中世部氣候のそなとをふ年又行事
仁明乃御門兼和元年四月小豐樂院
行事天經四六年二月
文德實錄第四仁壽二年正月甲戌幸豐樂院以覽青馬助陽氣也賜賞參議已上如儀
は紫宸殿にて御讀をうけさせ式
乃行事礼記小春を東郊ふむ人へ者
馬七丈成用ちとあるいは陽乃教
七火成數也
少陽乃時なりと又十月紀小白馬をとられ
賢木卷河海抄引之
性法師とと天小白龍有池水白るを
又乃種用は諸なり池周いちを人乃周を

○江次第云件御馬本数二十一疋也毎年左右寮各十疋進之其残一馬寮之餘馬隔年両寮互進之
○寛平書曰御馬本数二十一疋禮記曰以青馬七疋然而用二十一疋者三七之義也三陽之数七日義之由見寛平御記
○毛ヅケ毛色書付ル事心得ルナレモ馬数付ル絶馬八疋十六疋ヤツゲハ十モ乞ヘキ敷雖略　大皇下歎ニヨメリ
○小安殿江次第抄云大極殿後房也

なりとや年々是を御らんずる今の節会には二十一疋
也一説には陽の数なれば三は三陽なり
とかや七は七つにあたれり寛平の御記
よりはじまれり今日の毛はけれハ慶に
番殿あり毛をつけて奏す是白馬の数を
とる敷也儀式なとは大かた元日におなし
かし元日には此事あれば記すにも不
詳あかれは書の様天武天皇十年正
月七日に御門小安殿におはしまして宴
会の儀ありき是や七日の節会の始なるべからん

○金光明經ハ即最勝王經也金光明最勝王經十巻大唐ニ三蔵沙門義浄奉制譯

九 御斎会 八日

是は大極殿にて八日より十四日まで七ケ日の
間最勝王經を講ぜらるゝ今上家を
祈なり此經は國家を護持するに功能
あるによりて殊に尊き經の中にも此經を
尊重せらるゝなり天平元年十月に大極殿にて
講讀ありしに聖武天皇九年正月に始
て金光明經を講じしより論司ありて
講じられたまひしを始とハいへども桓（五十代）
武の御宇延暦廿一年正月よりの事となる

内道場○僧史略云内道場起於後魏而得名在乎隋朝

○文苑英華第二百二十六編送契玄法師赴内道場詩侍郎御老夫灌頂遇醍醐御呈嬪心魏君王賜髻珠降魔須戰否問疾敢行無深契何相必需宗本不殊

治部省ニテ

○延喜式玄蕃寮式凡大元帥法毎年正月起八日至十四日一七箇日於省修之

殊事ハ成ル事なるべし

真言院御修法　同日

今年

去る七日ハこゝ分つるこゝ金剛

淳和天皇天長元年号

界ハれい脂義界ハ小聖ノ人修法

仁明天皇天長年號

後七日御修法ハこゝ此事なりて長

六年小弘法大師大内道場小法ハ

性靈集補闕鈔巻第九官中真言院正月御修法奏狀

真言院ハ文中小ノ直ハれく義和元

年ハ大師分此法をこゝ先ハ分

十一月乙未卜奏

也一

去元師法　同日

治部省ハ七ケ日ハ先ハ分る義人

密乃密人ハ御衣を脱く壇ハ

多治御衣ハよりく繼ハ法かりて先ハ

ゆ法ハ分ハ義人財を付ル先を

治部省小法ハ分て修行をこゝ

結形乃貝法衣をこゝ西を

形也此修字をハ不讀て元法と

毎ノ仏ハ小ハ代ハ常曉律師

仁明天皇嘉和元年

小ハ廣ハて義林寺

元慶ハ人小ハ此ハ元師法を

法ハ秘法ハて異教ハ都ハ

小栗栖八山城ニアリ醍醐邊也

○常曉傳在元亨釋書

法琳寺。拾芥下本法琳寺太元堂是也太元令移給井有之以彼水行彼法文德御時常騰律師入唐之後造之在小栗栖

大輪轉小輪轉。江次第抄大輪轉女司以下七人輪轉叙爵外記進其勘文中古以下絶畢。江次第云小輪轉闈司　主水　東豎

大輪轉　女司　主殿　女官　御手水女官　掌縫女官　闈司　主水　東豎

うつかの勘文。江次第云空勘文自後朱雀院時不載司叙之者只載例新故無空勘文

[文德天皇実録]

[三]　女叙位江次第三　同日江次第云式日近代擇吉日

[輪]

[付江次第ニヨリ]

[ヒキツヾイテ]

[付江次第ニヨリ]

[ヒキツヾイテ]

[付江次第ニヨリ]

[ヒキツヾイテ

三十二 ○江次第抄云東堅以三子爲東孺女舊薄多以紀朝臣季明阿閑宿禰女成爲其名中古以來以季明定爲其名不似尋常事也

持統天皇御宇 ○日本紀持統天皇五年春正月癸酉朔賜親王諸臣內親王女王內命婦等位

十一月 神武天皇紀ニ稱ニ十月十一月トヨム

西座 西宮記不破節會西座爲女王座

○江次第云賜時服王定四百二十九人待其死闕依次補之但改姓爲臣之闕不補其代隨即減定額數凡賜祿女王定二百六十二人其隨闕補代及改姓不爲闕

十三 給女王祿 東宮書女王之二世已下四品以上也

十一月

參議辨史等ハ女王ノ祿ニ給事アリ 注次第云其祿法人別絹 疋綿六兩

ハ四百ハ人女王二百六十二人ト宣ヒ

ク年毎ニ祿給事ハ女王

祿ノ字ハ書ラレトモ事ハ計

濃ク女ノ字ハ給ヒ給ヒ

高賜 縣君除国

賜君ハ郡官ハ郡官ハ諸國ノ

[執筆] 硯 不用唐硯 筆 不用丹管班竹等 故實件筆可用白管

磨墨事除目、清墨叙位、濃墨云云 一度磨之不再磨凡爲令水皆爲墨久磨之○江次第執筆事條尻付事 依前例是風記也以略寫先執筆之人事自名清院齋宮不必注某親王

[大間ガ久] ○後醍醐年中事云凡一人任公卿作法アリ申文讀申コヲ物ヲ見大間其所トヲ筆ヲ染テ大間ニ書ツケ申文ニテンヲクヲクヲク

伊豆國
従正六位上金刺宿禰
祢為頼 偉尚侍藤原朝臣真子、承暦元年給二合所任筑前掾上毛野尚平所任
權掾正六位上伴朝臣
為重 偉左兵衛督藤原朝臣承暦二年給二合所任
依紋五節舞挑二合所任 上総大掾大岳良貞所任
是名國共替之書樣也
任符返上國替
尾張國
掾正六位上大江朝臣清長 返上清常陸大掾五年遷給二合伊豫守駿平親王正掾貴成為恒任符所任
年限多過
大隅國
掾正六位上藤原朝臣篤孝 前左皇太后宮亮祚 年御給伊豫掾

つまさきいたる大臣大連なとの号はかりあり文武
天皇の大寶令に漢海云不沙等は勅のりと
律令定官位位階乃事はの書はらはらと
官位令職員令
官もまこと人は
ぬくはかりさまと令乃官とかり
内大臣中納言公卿以前官とは内大臣公卿外は数人寶令不載中納言は大寶元年二月
ゆゑ位階云いと人等とはらいかの
龍亡同年八月令撰之故不載九年後慶雲二年更二中納言置仍于養老令載之
もこと号なれとも官位令はの勅の
ぬくはかりさまと令乃官とかり
官定官位令はの勅の
除目とは京官
乃中乃人乃官とは

越智隆盛不給任符
清代
次任更任
土佐國
大掾正六位上日置
宿祢忠久 權大納言藤原朝臣永保元年給二合所任刑部卿吉安不給任符
更任
是得替更任他人中
任同官之書樣也
○朝野羣載第七 史名替
正六位上藤井宿祢為
里 望稲荷社
右者寛治元年正月以
安倍則枝任備後掾而
稱非本望不賜任符仍
以為望可被改任之狀
所請如件
承徳二年正月廿五日
關白從一位行内大臣

十四日 御齋會 論義 十四日
大極殿
七日講也
十四日御祈會 結願なり内論義御殿
くはりの御祈會 南殿にあり同都
論御 おこなはる論義とはれ
問論義とは孝德天皇白雉三年四
月小西原御門内裏の小殿にて無量義
經講 御門重賢を論義者として
一千人乃僧侶 日中記しは
二十五
きりの又二長橋手を
月廿四日 延暦寺乃僧侶
澄を論義師とみくり見たるは

藤原朝臣

蚩尤上云惡人。日本朝月令云黃帝伐蚩尤之時以正月十五日伐動之其首者上爲天狗其氣伏而成地雲夢浮橋河海抄引之

事はてゝもとの屋にかへる

英　敦御粥　十九日

昔他國の事にかゝはりて惡人をきる
の黃帝とゝ御門とゝてひろく二月十五
日小豆たゝいのよりてれぬを首に天狗
成くもりの地雲とゝなる色ふりてゝふ
雲のはのぼきりの粥にまて庭中小豆と
をくゝ天狗を祭りくを後東ふ向事深く
ひさまつきて色成合をれい逢中に和氣
成のそをとゝいふ事後のをこゝ幸民也

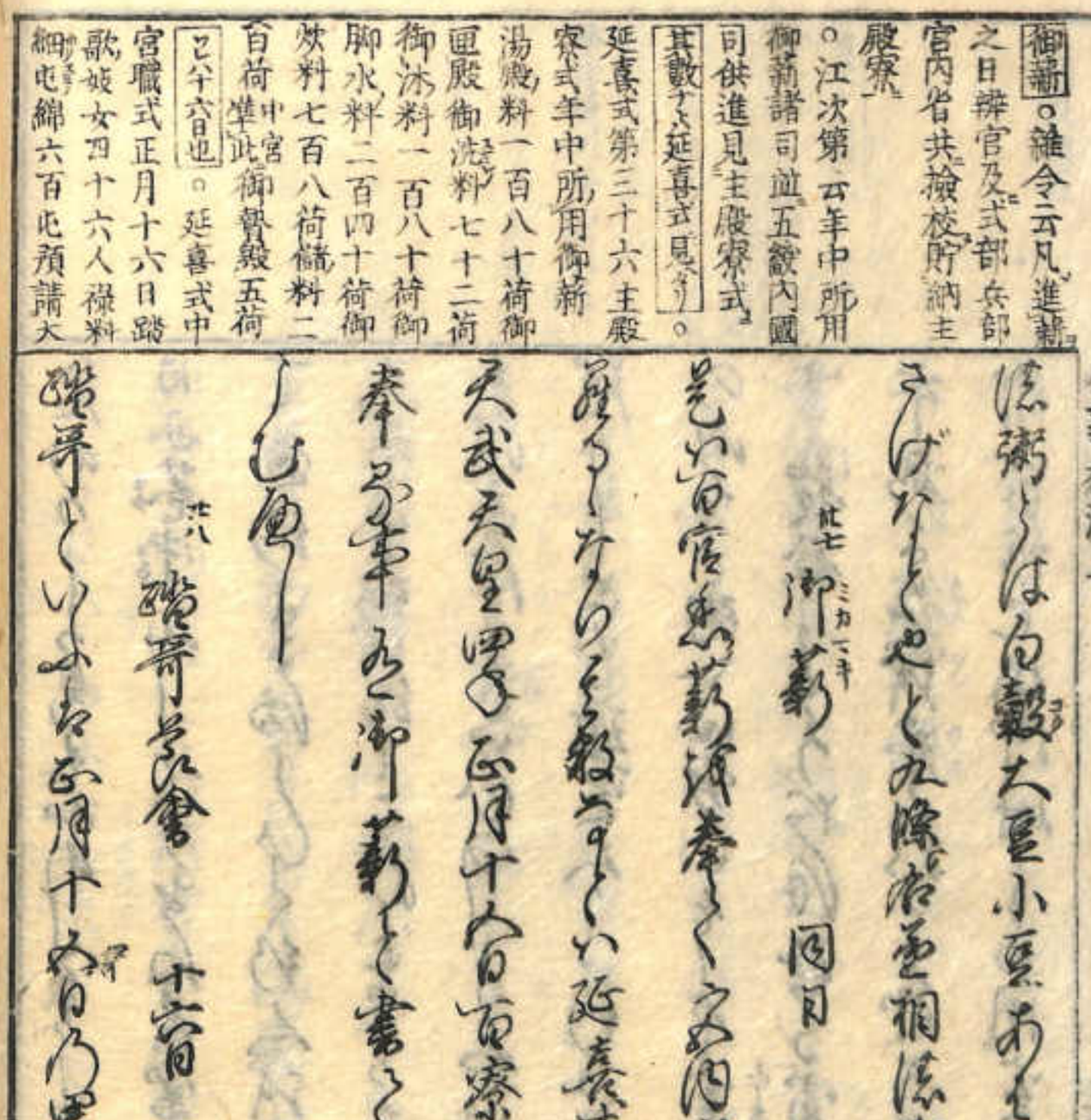
絶おろしの色も仏ゆをして二月十五
日は巷中ゆしてうきは雲魂とくまり
て通行よりひく行人成なまれ此
人年生粥のこゝをきゝ有よ今日色を
まりはをさひのゝ此この後のまを
成りとも雜宮大うわく海養屋
の御ゝく粥を四方よそを事もうゝ法
事殺をゝう於日殺る寅年乃法ゝ
年殺よ法奉をゝ三月三日年をゝ
御云法を山御門ゝの同宮ゝ殺ゝ

御新。雜令云凡進新之日辨官及式部兵部宮内省共檢校貯納主殿寮。

○江次第云年中所用御新諸司並五畿内國司供進見主殿寮式。

其數不延喜式見ヨリ。

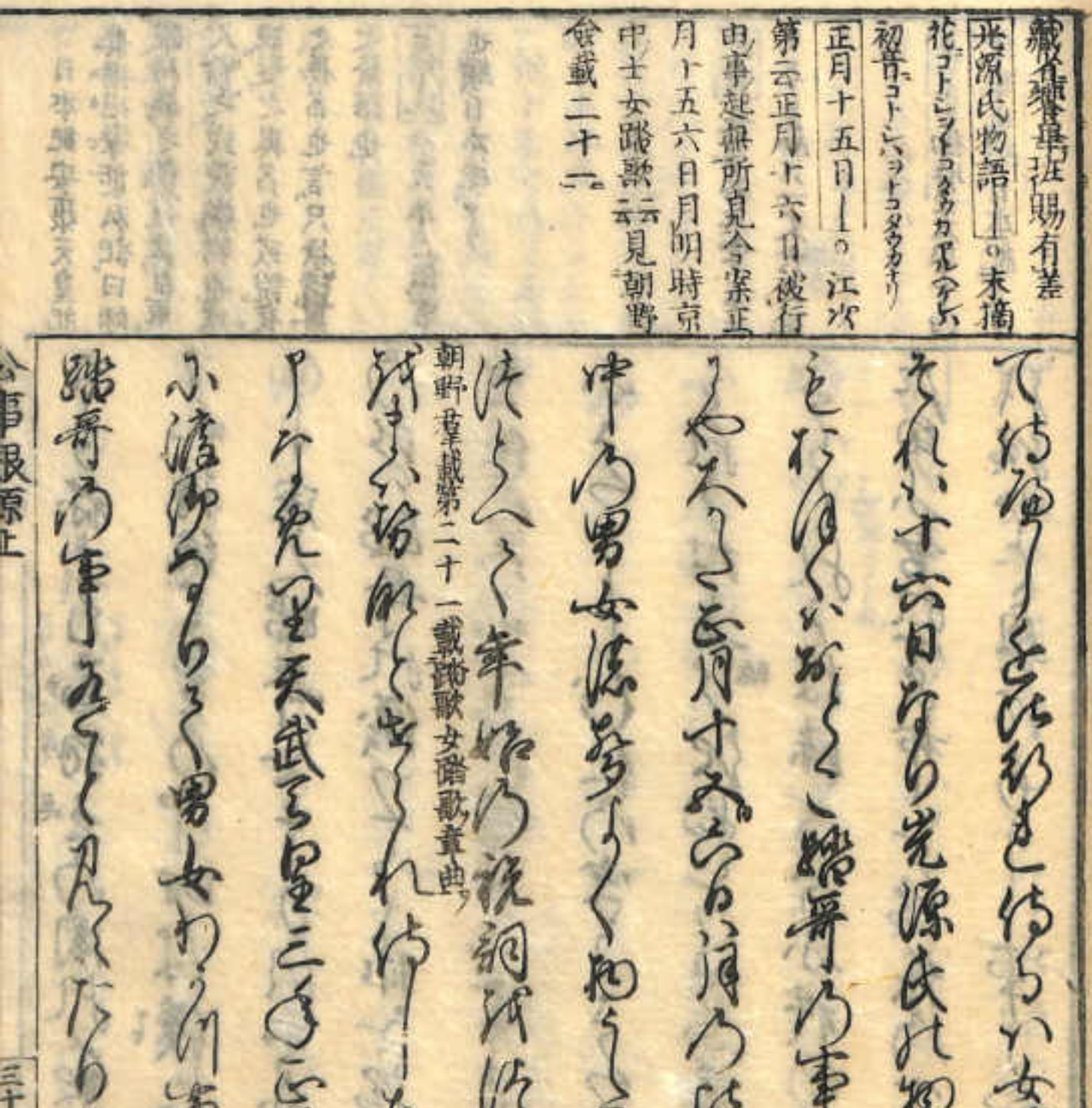
延喜式第三十六主殿寮式年中所用御新湯殿料一百八十荷御匣殿御洗料七十二荷御沐料一百八十荷御脚水料二百四十荷御炊料七百八荷儲料二百荷中宮準此御贄殿五荷已下官也。延喜式中宮職式正月十六日踏歌妓女四十六人禄料細屯綿六百屯預請大



藏省雜事班賜有差

光源氏物語上。末摘花コトシヲトコタカカルヘシ初音コトシハヲトコタカカリ

正月十五日上。江次第云正月十六日被行由事延喜所見今案正月十五六日月明時京中士女踏歌云見朝野僉載二十一。



朝野僉載第二十一載踏歌女踏歌章典

○日本紀安康天皇紀
農播磨摩能私記曰師
説烏羽之實也其色黑
人喰之或説鵜羽也或
説髮之異名也或説夜
之異名也言只欲讀黑
之發語也

天平比 ○天平二年事
也續日本紀ノ

長常 長サ二尺二寸三
キ 長常八尺六尺也

又ヨナヒ御時 天平十四
年事也續日本紀ノ

孫も爲ば玉乃園に取つも有
る持統天皇乃御時は濱人踏哥を奏
し唐人踏哥と云ふ也天武天皇二年
乃比踏哥に儀乃ても祿を給て仁義禮
智信乃字に紐籍小書く是を入く
かさしむ信乃字はさてのあつりた
えたなる紐えぬとふ義乃字に紐留
ふ禮は絲の字に禮式
乃四小智に布を結信乃字は濱常布
式結いと奥行りし事りや又おそしき

あさくしき ○古今和
歌集卷第二十かなな
ひろ〳〵
新しき年始ふくしこ
を千年ながきくらの樂也
きとつろ
日本紀に代くまりくよ
ろの代まてる
能兼童蒙抄此日本紀
續日本紀也
一説千年とゝてゐれ
きとつはと五代くろ
されとも續日本紀説た
しかれ猶正説とい
ふへし

三子キ五子キ五 ○内辨宣大
夫遷名少納言稱萬出
及

御時踏哥に云ふは六位以下乃人〳〵琴と
引くらひくいとくあつらしき年法
如此コヲ上也
始小也うつ法人まり羅先義式まく
小延暦十四年乃正月は詩式作りてう
義要抄とも云ふ代帝會法儀式也常
式とも云ふ代今更記不及え日踏哥とは小節
とも白馬節とも云ふ大節とも云ふ小節とも
云ふ内辨作を大臣とは加祿
常と内辨作とる者先ゝ是なてまちさん
たちとは大夫遷とゝ五位乃を云ふ

[illegible]

[illegible]。日本紀私記云今俗曰阿良礼走師説此歌曲之終必重稱萬年阿良礼今故云萬歳樂是古語之遺也

玉葉卷河海抄同卷カサシノワタノ抄踏歌人以綿造著冠額是号高巾子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○裏書云賭弓大蔵省進射遣募物佐度布是以奏弓場殿令四府奪之

禮記○禮記月令仲春之月振旅以弓矢授以弓矢于高禖之前

近衛院年号

罰酒○裏書云康治二年宇治左府欲行罰酒以久絶故不行云云

四府左右近衛左右兵衛

○合不二左右近衛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大將左右ナク參内事
○江次第云左右大將申障以隨身就載人所當日有障內仍參入若大臣大將者可進出納
○裏書云大將必申障故實也依不諸變故再三召之後參仕也

實空 ○元亨釋書十寛空姓文室入内州人事神日爲弟子又稟覺平上皇密灌兼得圓堂院事天曆帝勅修祈雨法過期不雨君臣落膽空乃著法服捧香爐入宮庭立焚香訓兇密觀須臾千時陰雲忽起大雨暴降宮城而已不到他所時人奇之康保元年爲僧正天禄三年二月六日化年八十九

文人 ○花宴河海抄云文人詩作人也呉音ミヤウニン是名目也ツノ物語ニアリ下云文人上題給ヲミヤウニン

保元三 ○平治元年正月廿一日被行内宴

以ていたらしめ給ひ侍りしかばなり
是參内をもぬ事ゆるされ給ふ
事ゆるされ給ふ又度々の賭弓として陰時小弓と
御覽ぜらる事ありしを數ならぬ法師なれども
陪侍仕りしかば

三十一 仁壽殿觀音像 同月

東寺法長者しるべ人法此事を勤仕
堂內乃河內真言院にて仕りて廻和二年
或記云內裏正觀音一體高七寸見長曆四年十月十九日注進仁海僧正奏
六月十日觀音像一旋供仁壽殿上安置
御實堂供養にて同御供養あり是毎月

法事にて三子の御祈乃爲なり者い又
居住僧にて二間ハ加持
禁秘抄云二間數壇一帖北間向妻戸敷
阿闍黎座半壇一南間如御講之時懸本尊寄障子也
三十二 內宴 次一日
內宴にて法花會なり仁壽殿
にて文人ども詩を
作り御おとて藤を詩次一日
二日廿三日乃經子時日小あり其日不
二所乃二歌乃御觀を云御ゆ
乃あり保元小法西中行作

國忌。江次第云東寺儀但雖西寺國忌於東寺行之依西寺荒也

天子七廟。禮記王制云天子七廟三昭三穆與大祖之廟而七大全米云曰蓋太祖之廟始封之君居之昭之北廟二世之君居之穆之北廟三世之君居之昭之南廟四世之君居之穆之南廟五世之君居之廟皆南向各有門堂室寢而牆宇四周焉太祖之廟百世不遷自餘四廟則六世之後每一易世而一遷其遷之也新主祔于其班之南廟南廟之主遷於北廟親盡則遷其主于大廟之西夾室而謂之祧凡廟主在本廟之室中皆東向及其祫于太廟之室中則唯大廟東向自如而爲最尊之位尊昭之入乎此昔皆列於北牖下而南向尊穆之入乎此者皆列於南牖下而北向南向者取其向明故謂之昭北向者取其深遠故謂之穆蓋群廟之列則左爲昭而右爲穆祫祭之位則北爲昭而南爲穆也又云毀廟云者何也曰春秋傳曰壞廟之道易稽可也改塗可也說者以爲將納新主示有所加耳非盡徹而悉去之也

昭祧穆祧。○祧玉篇他

國忌

廿八日

長岡殿院乃母后女御藤子乃御忌日也天仁元年小[村上天皇母后御國忌前見多]

[祭法云王立七廟一壇一墠[考廟曰皇考廟曰顯考廟曰祖考廟曰皇祖考廟曰遠祖廟曰祧]]

廟乃內大祖[祧]祧[祧]祧[祧]祧[祧]

[祧京嘗乃止太祖[祧]爲壇壇爲墠墠爲墓墓之無後者乃止太祖[祧]]

其外乃四廟[所]

[殿]

[殿]

[殿

公切遠廟也

サンダイナシ 昔國忌天智天皇崇福寺 植武天皇西寺 仁明天皇東寺 三代行幸時八月國忌日各請當寺僧一百口轉經禮佛治部玄蕃官人請寺布施物アリ 忌日樂 ○禮記祭義註忌日親之死日也

○又檀弓上忌日不樂

○管絃 孝德天皇紀

廢朝廢務 ○禁秘抄云廢朝者諸司政如恒天子不臨朝政廢務者諸司不政一日或三日○又云世代事大臣奏時有之依事淺深或五箇日或三箇日也廢朝二日被御ス八止音奏警蹕禁中

伝へ廢朝とくやの法同れ改ゆ法法ゆ
ふ法ゆらの行行日こゆも王子三つ経
朝よのぎみくゆ面と来ゆ一わさ也せこ三代
い驛朝ふ廢朝い数日ととしよべ
法司奏政事法ゆら兄さと生へゆり

三西 神祇官御贖物 皆

毛い毎月乃法とこゆふさくまつ御麻を
おゆ食代供ま法ゆ和い身れわらひ法ゆ
ふ和といふ色也人新法代と分法代と
ゆら事物ゆ ゆ古事紀ゆ仲哀

贖物音垂清涼殿御簾第四日可上御簾而當惡日或無沙汰及數日○古事記中卷仲哀火見考既崩記介警懼而坐殯宮更取國之大奴伝種種求生剥逆剥阿離清理屎戸上通婚馬奮牛婚鶏婚犬婚之罪類爲國之大祓

外記政始後醍醐年中行事九日丁ヒ此比ヨリ奏アリ

天皇ゆ豊浦法宮ふ御ましゆ時ゆらじゆく
御ゆ和を供むとゆみゆら又日事年
紀ゆは天富命麻とうへ御ぬゆ法ゆら
舊事本紀七神武天皇紀天富命更求沃壤分種好麻来綿木棉
て奏ゆらゆ麻大幸會繰
い後米殿院乃御時ゆらけまゆけ
六十九代
匠房御記ゆ乃ゆなり

三十五 外記政始 江次第十八

毛い右日とゆゆらびくおこなよ光の日な
新べき更と御光御簾あゆりも
ゆり宰相廳ゆ法くこ法ゆらきゆ条ゆ

カタナシ

○結政所 見江次第

○續後拾遺卷第十六

雜歌中

外記廳結政座ノ古宮ノ柱ノ今ノ所ノ

中原師光朝臣

南所 名月抄云 在外記廳

出立圓 大曆延文三年正月卷云於南所門外將上寫ノ次第四位五位樹南五位立樹北

紙云 外記廳ノ事ヲ記ス

御所ノ事ヲ大内ノ事ヲ

いくさ出さるゝ

ものゝ陣ノ

儀式時ノ次

は先南ノ

使ノ廳ノ